

真紅の絆

第二章 涙

八神大輔

1

男は、いつもどおり水を汲むために川へ向かっていた。人が足を踏み入れることのない山奥。そこに小さな小屋を建て、男は暮らしていた。ひとりきりで、もうずっと長い間。

だが、彼のいつもの水汲み場には、今日は先客がいた。若い女が、倒れている。

体は半ば水の中に浸っている。どこかで川に落ちて、流れ着いたのだろうか？

そこで男はふと顔を上げた。すぐそばにはかなり大きな滝があり、激しい水しぶきをあげている。

もしあそこから落ちたのなら、助かるまい——そう考えながら、女の体を川から引き上げた。

上体を抱きかかえ、水に濡れた長い髪を払って顔を覗き込む。

その肌は白磁のように白く美しかったが、死を思わせる蒼白さはなかった。

息はある。

かすかに驚きを込めて、男はその美貌をしばし見つめた。「ん……」

女が身じろぎをし、眉をひそめる。武……さん……、薙……」

うわ言に人の名前を呼んだが、意識を取り戻しはしなかった。男は彼女を腕に抱いて、立ち上がった。

＊

「深雪……深雪……深雪……」
遠くで、名前を呼ぶ声がする。

「――誰？ 私……」

「深雪……深雪……深雪……」

答えはなく、ただその名を呼び続ける。胸が切り裂かれるような叫び。

悲しみが、流れ込んでくる。誰なの？ 誰を呼んでいるの？ 私……」

還らぬもの、手に入らぬものを呼ばれる声。それは私の悲しみを呼び覚ます。

だからやめて。そんな風に嘆くのは。私は――。」「……！」

突然の意識の覚醒に、刺すような頭痛が伴った。沙夜はゆっくりと周りを見回す。粗末なログハウス風の部屋の中にしつらえられたベッド。そこに寝かされているようだ。

体を起こそうとして、一糸まとわぬ姿であることに気づく。シーツを胸元で押さえながら、上半身を起こした。「こは……私……？」

まだ痛みが残る頭に片手を当て、記憶を呼び覚まそうとする。

しかし、目覚める前の不思議な夢と意識が混濁して、状況把握ができなかった。

そのとき、ドアが開いて、男が入ってきた。反射的に身構えて、誰かをかばおうとする――誰を？

「……気がついたか」

男は沙夜の様子になど特に関心のない風情だった。年の頃は二十歳前後だろうか。もっと若いようにも見え

し、逆に老成したところが垣間見えるようでもあった。不思議と、警戒心は沸かなかつた。沙夜はやや緊張を解

きながら、男に話し掛けた。「こは……？」

「こは……どうして？」

川岸に打ち上げられていた。おそらく滝から落ちたのだら

う。よく生きていたものだ」

ぶっきらぼうに男が答える。

その言葉で、少しずつ意識を失う前なのが沙夜の脳裏に浮かんできた。

渾から……落ちて……」

そうだ、あのとき――。

魔物と戦いになったとき、女の子が現れて……とっさに守ろうとした私と、薙が……、――薙！

薙！ 薙は？」

「……？」

藍色の髪をした、ショートカットの女の子……私と一緒にだったはずの……」

「知らん。俺が見たのはあんただけだ」

「……そう……」

川辺に倒れていたときより、さらに蒼白な顔でうつむく沙夜を、男はやはり無表情に眺めていた。そして手にしたもの、沙夜の枕もとに置くと、

着替えた」

一言言い残し、部屋から出て行った。

男が置いていったものを、沙夜は手に取った。男物のTシャツとズボン。どちらもぶかぶかだったが、そのままの格好でいるわけにもいかないので、袖を通した。ズボンのすそをまくり、ウエストはベルトをきつく締めることでどうにかずり落ちるのを防いだ。

ドアを開けて、外へ出る。隣の部屋には机があり、男は腰掛けて珈琲を飲んでいた。

向かいの席には、湯気を立てるカップが置かれている。

沙夜は男のそばに立ち、頭を下げた。

「あなたが助けてくださったのね。ありがとう。さっきは混乱して……ごめんなさい」

「……」

男は何も言わず、向かいの席を指した。

沙夜はその席に腰掛け、目の前のカップを取った。カップにはホットミルクが注がれていた。両手でカップを包み込むように持ち、そっと口につける。

ミルクの温もりが、体の隅々まで満ちていくようだった。

「……おいしい」

宝石のような笑顔がこぼれる。

その笑顔を、男がじっと見つめていることに気づいて、沙夜は微笑みながら首をかしげた。すると、男はややぼつが悪そうに視線をそらした。

「？」

見とれていたのだ、とは沙夜は気づかなかった。

ミルクを飲み干し、カップを机に置くと、沙夜はもう一度男に頭を下げた。

「ごちそうさま。温まったわ。……えっと……」

少し顔を赤らめて、言いよどむ沙夜。男がやはり無言のまま視線を戻した。

「私の服はどこかしら？」

今度は、男がかすかに赤面したようだったが――動揺を表に出すほどではなかった。

「まだ乾いていない」

「そっか……。何から何まで、ほんとにごめんなさい」

屈託なく微笑んで、三度目の礼を述べた。目の前の男が、意識のない女に何かするわけがない。理由はないが沙夜はそう確信していた。

「じゃあ、この服、少しお借りしていいかしら？ 私、行かないや――」

そう云って、立ち上がる沙夜。男もまた思わず腰を浮かしていた。

「まだ出歩ける状態じゃない」

その言葉に、当の男自身が驚いていた。出て行くというなら止める筋合いはないはずなのに。俺はこの女を心配している？

そんな男の当惑に気づくはずもなく、沙夜はまた笑顔で礼を云った。

「ありがとう。でも、私、あの子を探さなきゃ。きつと心配してる」

その笑顔が心に染みたのは、いつか見た笑顔に似ていたからなのか――。

男は言葉を失い、ただ沙夜の姿を見つめた。

だが、沙夜がバランスを失って倒れそうになると、即座に動いてその体を支えた。

「あ……ご、ごめんなさい」

「云わんこっちゃない。そんな体で何をしようって云うんだ」

それでも難を探しにいくとする沙夜を、男は強引に抱き上げた。そのまま先ほどの部屋に戻り、ベッドに沙夜を降ろす。

「あんたが行き倒れたら、その子は喜ぶのか」

「……」

男の真摯な瞳の色に、沙夜は反論することができなかった。

張り詰めていた気持ち緩んで、つい涙がこぼれてしまう。

「……ごめんなさい。ありがとう」

「……」

男がそっと手を伸ばし、沙夜の頬に触れる。そして流れる涙を、ぬぐった。

「……あの……?」

「……!」

その優しい仕草に心を温められながらも、なぜ彼がそうまでしてくれるのかわからず、沙夜は不思議そうに男を見つめた。初めてこの部屋で会ったときには、彼は行きがかり上助けただけで、無関心な風だったではないか。

沙夜の疑問に気づき、慌てて男は手を引っ込めた。隠しうもなく狼狽してしまった彼は、そのまま何も云わずに部屋

を出ようとして――、ふと、何かに気づいて足を止めた。

「……探す手間が、省けたようだな」

「え? ……どういうこと?」

「寝ていろ」

沙夜の問いに答えず、男は後ろ手にドアを閉めた。そして玄関――というほどの作りではなかったが――のドアを開け、外に出た。

そこには、藍色の髪の少女が立っていた。

2

男と、少女——薙は、しばらくの間、無言で向き合っていた。

ふたりの間に張り詰めた気が漂う。——というか、薙が男に向けて放つ敵意がどんどん激しくなっていく。

その殺気と呼んでもいい激しい気の流れを感じて、男は外に出たのだった。

ややあって、男をきつく睨み据えたまま、薙が口を開いた。

「ここに髪の毛の長い女の人がいるでしょう？ 返してもらわよ」

「それが人にものを尋ねる態度か？」

すでに物理的な圧力に近い薙の殺気を正面から受けながら、男は平然と答えた。

唇を噛み、薙が身構える。酒吞と対峙したときと同等か、それ以上に彼女は緊張していた。

素直に返さないなら、腕づくで取り返す」

「できるのか？」

「——やってみせるわ！ それが私の約束だもの」

緊張感が限界まで高まる。先手必勝。渾身の一撃を薙が放とうとした、そのとき。

「——薙！」

沙夜の明るい声が響いた。薙が男の背後に目を向けると、ドアを開けて沙夜が姿を現すところだった。

「さやっち、ダメ、今、出てきたら——！」

このまま攻撃すれば、沙夜にまで当たる。とっさに薙は気を放つのをとどめた。しかし、状況はより悪くなっている。このまま沙夜を盾にされたら、どうしようもない——。

だが、沙夜はためらわずに小屋を飛び出した。そのまま男の脇を走り抜け、薙に抱きついてくる。

「……え？」

男がその隙に攻撃するどころか、何も邪魔しようとはさえしなかったことに薙は驚いた。

茫然と立つ薙の首に腕を回し、沙夜が涙を流す。

「よかった……。無事だったのね……」

「さやっち……」

沙夜の体にどこも怪我などないことを見て取り、薙は安堵の息をついた。

そして男に視線を戻すと、男はただ肩をすくめて見せた。お前の勘違いだ、わかったか？ そう云われたような気がして、薙は少し鼻白んだ。

まだわかったもんじやないわよ。ぶいっと横を向いて、薙はそう伝えた。

「さやっち、この男は……？」

安心して気が抜けたのか、また倒れそうになった沙夜を支えながら、薙が訊いた。沙夜は微笑みながら、

「私が倒れていたところを、助けてくれたの。えっと……」

そこまで云って、沙夜は気づいた。自己紹介さえしていない。

「あ、ごめんなさい、名乗ってもいなかったわね。常磐沙夜です。この子が……」

御門薙。あなたは？」

相変わらず警戒心を剥き出しに、薙が云う。どうしてそんな態度を取るのか、いぶかしげに沙夜は薙の顔を見た。

伊達将士」

一言言い捨てると、男——将士は背を向けて小屋に戻った。ドアを閉めなかったのは、入れ、という意味表示だろうか。

『どうしたの、薙？ 私のこと、心配してくれてたのはわかるけど、あの人は信用できると思うわよ』

「さやっち……」

やれやれ、という風に薙は頭を振った。そして真剣な面持

ちで、沙夜の鼻先に指を押し付けた。

「もつと鼻が利くようになってくれないと、命がいくつあっても足りないわよ。自分が闇の者にとってどれだけ価値があるか、知ってるはずでしょ？」

「それはそうだけど……、……！　じゃあ、あの人……？」

間違ったわ。それも……最強の一族……！」

将士が消えたドアを見据えて、薙が呟いた。
しかし沙夜はその薙の言葉と、さっき頬に触れた手の優しさとの溝が埋められず、茫然と立ち尽くすばかりだった。

3

重苦しい沈黙が降りていた。

薙は本当はこれ以上将士に関わらず、ここを去りたかったのだが、消耗している沙夜を休ませる必要があった。そのため、やむなく沙夜の勧めに従って、将士の小屋に身を寄せていたが、不本意であるということを思いつき面に出して押し黙っていた。

将士のほうもふたりを拒むでもないが、何を云うでもなく、ただ黙って座っている。

そんな両者の間で、沙夜もまた途方に暮れて言葉を失っていた。

「あ、あの……」

どうにかこの状況を打開しようと、沙夜が口を開く。

伊達さんは……」

将士でいい」

将士……は、どうしてここに……？」

「……」

「あ、ごめんなさい、立ち入ったことを……」

「どーせ人目を避けなきゃいけないようなことしたんでしょ」

「……薙！」

「……」

再び沈黙。沙夜は頭を抱えてため息をついた。

ほかに話題はないものかと考えて——滝から落ちる前のこととを、思い出した。

「そうだ。あの女の子は……？　大丈夫だった？」

「うん、大丈夫。ちゃんと守ったよ」

「よかった……」

胸をなでおろす沙夜とは対照的に、薙は申し訳なさそうに表情を暗くした。

「でも、そのせいでさやっちへのフォローが遅れちゃった。それでこんなことになって……ごめんね。その子を村まで送っていかなきやいけなかったから、すぐ探しにも来れなくて……」

「いいのよ、そんなの。それに薙がとっさに結界を張ってくれたから、私も怪我をせずにすんだんでしょ？」

「さやっち……」

そんなふたりのやり取りを、将士が不思議そうに眺めていた。

その視線に気がついた薙が、沙夜の耳元で——将士に聞こえるように——囁いた。

「見て見て、妬いてる妬いてる」

「……薙ったら」

「……」

これには将士も思わず苦笑をもらした。

座りなおし、薙のほうをまっすぐに見る。射るような強い視線。薙もまた正面から睨み返した。

ふたりの間で、またしても緊張感が高まっていく。

「お前……叢雲、だな？ 何を企んでいる？」

「企む……？」

「剣であるお前が、主を求めるのは当然の性だ……。だが、自分より霊格の低い相手を主に選ぶことはあるまい。沙夜……と云ったな、彼女を利用して何を為そうというんだ？」

「な……」

将士の言葉に、薙は毛ほどの動揺も見せない。むしろ沙夜のほうが、驚いて思わず腰を浮かしていた。

利用？ 薙が、私を？

何を云っているの？ それに……私は薙の主じゃないわ。薙にとつての、剣の主はほかにいる……。彼女はその主の命で、私を守ってくれているのよ」

確かに沙夜は「叢雲」を使いこなした。しかしそれもまた、薙や武が一時、自分に力を貸してくれただけだと、沙夜は思っていた。

「そうは見えなかったな。それに……」

一度沙夜のほうに視線を走らせたが、またすぐに将士は薙を見据えた。薙は変わらず冷静に、将士の視線を受け止めている。

「剣がその身を預けること……そのことを、軽く考えすぎているのか？ 剣の民にとつて、その本来の姿を委ねるということとは——」

「意外におしゃべりね」

将士の言葉を、薙が遮った。表情を押し殺し、挑発的な台詞を叩きつける。

「こんなところで世捨て人を気取ってるくせに、その正体は噂好きなミーハーってこと？ 一族の誇りが泣くわよ」

薙。やめなさい」

強い口調で、沙夜が云う。薙は肩をすくめて、口をつぐんだ。

「……お前が何を考えようが、俺には関係ない」

「将士、あなたももう——」

「だが、俺はお前が気に食わん。友さえも欺き、何かを為せるところなのか？」

「……」

「——答えろ」

静かな一言だった。だが同時に、将士から発せられる気が、桁違いに膨れ上がった。

沙夜はほとんど金縛りに近い状態になって、声を出すこともできない。

「なんて……霊格……。薙の云ったとおりだわ……」

その気を、薙は真正面から受け止めた。必然的に、薙の全身からも気が吹き上がる。

激しい気のぶつかり合いは、小さな地鳴りさえ起こした。机がカタカタと揺れ、窓ガラスにひびが入る。

ついに限界を迎え、気の奔流が爆発を引き起こそうとしたとき——。

薙が、ニツ、と笑った。
 途端に、気の流れが変わった。激しくぶつかっていた気を、薙はすべて受け流してしまふ。流れに浮かぶ木の葉のように。それは、戦意のなさを示すと同時に、薙の実力を示していた。

「……」

軽くため息をついて、将士が気の放出をやめた。
 瞬時に静寂が訪れる。ようやくまともに息ができるようになって、ふうっと沙夜が長い息をついた。

「……食えん奴だ」

「ふふん」

Vサインを出して見せる薙。完全に間を外された。
 将士は頭を振りながら立ち上がった。

「飯にするか」

「さんせーい。もうお腹ぺっこぺこ」

明るい声を上げる薙を軽く睨みながら、将士は簡易キッチンに立った。

「あ……手伝うわ」

「いい。休んでろ」

そう云われたが、沙夜は将士と並んで立ち、食事の準備を始めた。将士は沙夜の横顔をちらっと眺めたものの、何も云わず、作業を進めた。

しばしの間、何も会話はなく、ただ食事の準備をする音だけが響いていた。

「……あのまま続ければ、巻き添えを食ってあんたも無事ではすまなかっただろう」

独り言のように、将士が呟く。

沙夜は黙って手を止め、将士の顔を見た。

「奴があんたを守ろうとしているのは本気だろう。——だが、それには何か目的がある。あんたに隠した目的がな。気を許すのは危険だ」

「……」

沙夜は微笑みを浮かべて、料理を再開した。鍋のシチューをゆつくりと混ぜながら、同じく独り言のように呟く。

「ありがとう、心配してくれて」

「俺は、別に——」

「でも、大丈夫。私は、薙を信じてるから」

「……」

今は云えないことがあっても、時がくれば話してくれるわ。それでいいじゃない」

「……なぜだ？」

沙夜の横顔を食い入るように見つめながら、将士が訊いた。

なぜ、そんな風に云える。なぜ、そこまで人を許せる。

その、すがるようである視線に、少し戸惑った笑顔を浮かべながら、沙夜は答えた。

「理由が……いるのかな」

「……」

「人を信じるのに、理由がいる？」

「……」

将士は答えず、ただじっと沙夜を見つめ続けた。

沙夜は皿を取り出し、シチューをよそう。そうしながら、言葉を続けた。

「私は知ってる。ひとつの約束を、千年かけて貰いたひとを。」

だから、信じられるわ」

そこで将士に向き直り、微笑みながら、シチューをよそった皿を差し出した。

「持つていつてくれる？」

将士は半ば茫然とその皿を受け取り、テーブルへと持っていった。

沙夜の笑顔が、心の深いところに沈めた何かに触れた。

そう、あの笑顔が俺は知っている。傷つき、迷い、それでもなお自分に向けられた笑顔。

それを守るためなら、どんなことでもできると思った。

——しかし、そのことに気づいたのは、喪失の瞬間だったのだ。
降り積もる雪の中、腕の中のぬくもりが次第に失われて……。

「――将士？」

ふと腕に触れた感触に、はっと我に返った。

目の前に、気遣わしげな瞳がある。

『どうしたの？ 気分でも悪いの？』

『いや……なんでもない……』

故意に沙夜と目を合わせないようにして、将士は椅子に腰をおろした。

沙夜もそれ以上は問いかけようとせず、薙と自分の分の皿を持ってきて腰掛ける。

将士はそのあと何もしゃべらず、何かをじっと考える風だった。薙はそんな将士を観察するように見据えながら、スプーンを取る。

はじめと同じように、沈黙が降りたまま食事の時間は過ぎた。けれどその沈黙に、さきほどのような居心地の悪さはないように、沙夜には思えた。

＊

灯りを消してから、どれくらい時間が経っただろうか。

衰弱しているはずだが、妙に寝付かれず、沙夜はベッドの中で寝返りを打った。

すぐ隣には、薙が寝ている。こちらに背を向けている姿をしばし見つめたあと、沙夜は手を伸ばしてその髪を撫でた。

（よかった……無事で……）

だがそのとき、沙夜は薙の肩が小さく震えていることに気づいた。

泣いている？

薙……？

沙夜が体を起こして、薙の顔を覗き込もうとすると、薙はシーツを頭までかぶってしまった。嗚咽はやむことがない。

『どうしたの、薙』

『ごめん……ごめんね、さやっち……』

薙……

沙夜は優しく微笑むと、薙の体を包み込むように抱いた。シーツ越しに頭を撫でながら、囁く。

『どうして謝るの？ 薙が私を守ってくれたんでしょ？』

『違う……違うよ……。わかってるんでしょ？ 私……』

『うん、わかってる……。薙は、私のそばにいてくれたわ……』

「……」

今はそれだけでいいの。ありがとう、薙

『さやっち……』

言葉をつまらせる薙を、沙夜は強く抱いた。安心させるように、薙の手を握る。

薙は子供のようになにその手を握り返した。

やがて嗚咽がやみ、薙が小さく寝息を立て始めたのを確認してから、沙夜は手を離して横になった。

暗闇を見つめる瞳から、一筋、涙が流れた。

雫が目を覚ましたとき、すでに沙夜はベッドにいなかった。寝ぼけ眼をこすりながら、雫は起き上がった隣部屋に行く。朝食の準備をしていた沙夜が振り返って、いつもと同じ笑顔を見せた。

「おはよう、雫」

「……おはよ」

その笑顔が嬉しかったから、雫もまた何もなかったように微笑む。そして大きく延びをした。

「早起きね、さやっち」

「もう日も高いわよ。居候なんだから。顔、洗ってらっしゃい」

洗面所はないので、沙夜が倒れていたあの川まで行かなければならない。ドアを開けて外へ出ると、ちょうど水を汲んできた将士と鉢合わせした。

「……」

「……」

激しく視線がぶつかる。沙夜が心配げに振り向いたが、

「……おはよ」

仏頂面のままだとはいえ、雫が挨拶をした。苦笑交じりの安堵のため息をついて、沙夜は調理の手を再開する。

将士は両手に持っていたバケツの一方を、雫に差し出した。顔を洗うなら使え」

雫が受け取ると、返事も待たずに部屋に入ってしまう。

バケツの水で顔を洗うことに雫は少し躊躇したが、どうせ同じ水だ、と考えて使わせてもらうことにした。

冷たい水を手のひらにすくい、やや乱暴なほどの手つきで顔を洗う。

そしてバケツのふちに手をかけ、水面に映る自分を見つめた。

「……すっかりしなきゃ」

バケツを手には取り、キッチンに戻ると、朝食の準備は完了していた。キッチンにバケツを置いて、テーブルにつく。

「いただきます」

「いただきます」

「……」

「あんた、行儀悪いのね」

「……いただきます」

それきり、やはり沈黙したまま食事の時間が続いた。けれど沙夜はどこか嬉しそうだ。こうして誰かと食卓を囲むのも悪くない、雫もそう思った。

将士はどうなのか？と考えると雫は何度か将士の表情を盗み見たが、特に感情を表すでもない。つまらない男。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

その言葉を、雫は将士の顔をじろっと眺めながら云った。ややうつむき加減に将士が答える。

「ごちそうさまでした」

その様子に、沙夜でさえ思わず吹き出してしまう。雫もくつくつと喉で笑った。

将士は無然とした表情で立ち上がり、キッチンに向かった。何をするかと思えば、珈琲を入れてくれているらしい。

やがて、カップを三つ持って戻った将士は、何も云わずに沙夜と雫の前にカップを置いた。

「ありがと」

変なもん入ってないでしょうね？」

「……」

「……」

「うそうそ。ありがとー」

カップを取って、口をつけてみる。雫にとっては癪に障ることだったが、その珈琲は非常においしかった。

「おいしい珈琲が入れられるのって、素敵な才能よね」

沙夜のその言葉に、将士はまた黙って横を向いた。

こいつ、照れてるのかしら？

その将士の横顔と、その横顔に向けられた沙夜の微笑とを面白くなさそうに眺めながら、薙は考えた。

「……さて、と。そろそろお暇する、さやっち？」

飲み終えたカップを机に置きながら、薙は云った。

ちよっと意地悪してやりたい気持ちがあったのは確かだったが、いつまでもくつろいでいられないのは本当のことなのだ。

「そう……ね。将士にはずいぶん迷惑かけちゃったし……」

「……行くのか？」

寂しいの？」

薙ったら」

とりあえず将士は薙を無視することに決めたようだ。もう動揺を見せることもなく、沙夜のほうだけを見て話を続ける。

「また倒れないようにすることだな」

「ありがとう。でも一晩休ませてもらったから、もう大丈夫。それに……まだ、カタがついてないんでしょ？」

最後の台詞は、薙に向けられたものだ。薙が頷きつつ答える。

「ごめん。ほんとへまね、今度の私」

「あの状況じゃしょうがないわよ」

「……魔物のことか？」

「そう。止めないで。だから、もう行かなきゃいけないの。……ほんとにありがとう、将士」

「……」

沙夜のまっすぐな視線から、つい将士は目をそらしてしまふ。そのことを少し寂しく思いながら、沙夜は立ち上がろうとした。

待て。魔物のことを、聞かせてほしい」

「……え？」

「この辺りは、魔物が出るようなところじゃなかった。あんた

たちが見た魔物ってのは、どんな奴だったんだ？」

沙夜と薙は目を見交わした。考えながら、沙夜が説明する。

「どんな……って云えばいいのか……、気の塊のような魔物だったわ」

「気の塊？」

「そう……邪鬼や餓鬼みたいな、そういうわかりやすい実体がなくて、とらえどころのないモノ……。それで、どう対処したのか、とっさに判断がつかなくて……」

「……」

『多分 霊』に近いものだと思うんだけど……明確な意思のようなものも感じられなくて……正直、よくわからないわ」

「……そうか」

沙夜と薙が見たその魔物は、一カ月ほど前から姿を現し、森に入った人々を襲うようになっていた。その噂を耳にして、ふたりはこの山に入ったのだった。

「だんだん、そいつの出現場所が人里に近くなってるの。そのうち、村を襲うかもしれない。だから、ゆっくりはしてられないのよ」

立ち上がりながら、薙が云う。その言葉には、沙夜を促す意味も込められていた。

頷いて、沙夜も立ち上がる。そして将士に深々と頭を下げた。

「ほんとにありがとう、将士。……さようなら」

将士は答えない。ただ無言で立ち上がって、ドアを開けた。そのドアを抜けて、沙夜と薙は表へ出た。もう一度沙夜が将士に頭を下げて、歩き始める。

その後姿に、ふと将士が声をかけた。

「殺すのか？」

沙夜が足を止めて、振り返る。瞳に深い哀切を込めて。

「殺したくはないわ」

それだけを答えて、沙夜はまた歩き出した。二度と振り返

らずに。

薙が将士に向かってあかんべをして、沙夜のあとを追った。ふたりの姿をしばらく見送っていた将士は、部屋に戻ると、椅子に座って深いため息をついた。椅子の背にもたれて天井を見上げ、何かをじっと考え続ける。

一度目を閉じ、開いた。そして立ち上がり、小屋を出て行った。

5

「ねー、さやっち、ほんとによかったの？
何が？」

「ずっとぼけちゃってさー。まんざらでもなかったんじゃないの？　しょ・う・じ・く・ん」

小走りに沙夜の前へ出て、やや上目遣いに沙夜の顔を覗き込みながら、薙は云った。いつものからかうような口調だが、目の色がどこか真剣だった。

「……なーに云ってんのよ」

肩をすくめて、沙夜はまた薙を追い越して足早に歩く。薙はそのあとを追った。

「ほんとに？」

「ほんとよ」

「ほんとにほんとー？」

「……もう」

沙夜が急に立ち止まったので、薙はその背中にぶつかってしまった。そのまま顔を上げると、背中越しに振り返る沙夜と目が合った。

「報われない恋の告白を聞きたいの？　知ってるくせに」

無言で沙夜の瞳を見つめたあと、薙はうつむいて額を沙夜の背中に乗せた。目を閉じて呟く。

「ごめん」

「どうしたのよ。らしくないわね」

「だね」

顔を上げると、薙は小さく笑って歩き出した。

「あいつ、ちよつといい男だったからさー」

またおどけた様子で薙が云う。それが空元気だとわかったからこそ、沙夜はその話に乗ることにした。

「……ふーん？」

いたずらっぽく笑って、薙のほうを見る。薙が不審げに振り返った。

「なーによ？」

「そゆこと？」

「だから、なーに？」

薙のほうに、まんざらでもなかったんじゃないの？」

「なっ……」

思いがけない逆襲に、薙は耳まで真っ赤になってしまった。

いつもからかわれることが多い沙夜は、嬉しそうに笑う。

「あ、赤くなってる。図星？」

「バカ云ってんじゃないわよ、もう」

ぶい、と前を向いて、そのまま歩き出す薙。さっきとは逆に、その後ろを沙夜がついていく形になった。

「だいたい、神剣が恋なんて、笑えない冗談だわ」

「そんなことないわよ。神剣である前に女の子でしょ、薙は」

「……」

「……」

「……」

「……それは違うよ」

足を止めた薙は、暗い面持ちでうつむいた。唇を噛み締めて、思いつめた表情を浮かべる。

「私は女の子である前に神剣だから……だから、パパは私を

天に戻したの。そうでしょ？」

薙……」

悪ふざけで薙の痛みに触れてしまった。沙夜は己の発言を後悔しながら、どう言葉をかけたものか迷った。立ち止まったままの薙の後ろに歩みより、背中からそっと腕を回して薙を抱きしめる。

「ごめんね、薙」

「……ううん、いいの。ごめん、変なこと云って」

小さな声で囁く薙。沙夜は抱きしめる腕に力を込めた。

「もし……もし薙が望まないなら、もう二度と剣になんかさ

せないから」

「ざやっち……」

薙は沙夜の腕から離れると、笑顔で沙夜の目を見つめた。

その笑顔はけて作り笑いではなかったが、どこか悲しげな

様子があふ、沙夜の胸は痛んだ。

「それも違うよ。私は、私の意志で、ざやっちを助けたいと思

ってるの。私が望んで、ざやっちの振るう剣になるんだよ」

薙……」

「よろしくね、マスター」

今度はいつもの少しからかうような笑顔を浮かべると、薙

は振り向いて走り出した。

「え、それってどういう……」

沙夜も走ってそのあとを追おうとした、そのとき――。

突風が一瞬吹きすぎ、――魔の匂いを、運んだ。

薙……これ……」

「お出ましのようね」

緊張に顔を引き締めて、薙が頷く。

ふたりは足を速め、気配のするほうへ向かった。

断崖からは、村の景色が見下ろせた。もうここからなら、歩いて一時間もあればたどり着けるだろう。

「こんな近くに……」

今度こそ止めないと、まずいことになるわね」

薙の言葉に、沙夜が頷いた。

同時に、将士の最後の言葉が思い出される。

殺すのか？」

殺したくはない。けれど、ここで止められなければ、今度こそ人里が襲われて大きな被害が出る。それはなんとしても避けなければ。

結局、人を守るためには闇の者を犠牲にせねばならんのではないか）

今度は、酒呑の声が聞こえたような気がした。

酒呑は時を与えてくれたが、まだ彼を納得させられる答えを、自分は得ていない――。沙夜は唇をかねでうつむいた。

「さやっち、来るよ！」

薙の言葉が、沙夜の意識を現実引き戻す。

とりあえず、やれることをやるだけだわ。

そう決意して面を上げた沙夜の前に、黒いモノが現れていた。

＊

それは、黒い「モノ」としか表現しようがなかった。淀んだ気が凝り固まったものと云えばいいのだろうか。実体もなく、ただそこに「ある」という気配のみが感じられた。

意識さえあるのかどうかかわからない。だが無差別に破壊を繰り返すのではなく、人に対してのみ害をなすことから、何らかの意志が働いているのは確かだった。

意志があるのなら、会話をすることもできるかもしれない。そう考えて、沙夜は一步それに対して歩み出したのだが、危ない、さやっち！」

問答無用で、それは攻撃を仕掛けてきた。黒々とした気配の一部が、触手のように何本も伸びてくる。

薙は沙夜をかばいつつその攻撃を手刀で受けた。

「あ……！」

霊力自体はたいしたことがなかったが、それに触れたことで体に流れ込んでくる負の想念に、薙は身震いした。思わず膝をついてしまった薙を、沙夜が抱え起こしながら後方へ下がる。

「大丈夫、薙？」

「うん……でも、おかげでわかったわ、こいつがなんなのか」

自分を抱くようにしながら立ち上がり、薙はそれを見据えた。まだ体の震えが収まらない。なんていう――なんていう深い憎しみ。

それはまさに闇そのものだった。ぽっかりと開いた穴に、憎しみだけが淀んでいる。

「これは……御霊だわ」

「御霊って……恨みを呑んで死んだ人の、荒ぶる御魂？」

「そう……だけど、これは人の御霊じゃない。動物霊や自然の精霊……そういった低級霊の集合体だわ」

「どういうこと？」

「多分、人間に殺された動物や、破壊された草木……それらの人間への憎しみが、ひとつに凝り固まったもの……。だからこれは、人への悪意のみで動いているのよ」

「そんな……」

薙の神気を受けて一時ひるんでいた御霊が、再び迫り来る。だが薙が張った結界に触れて、慌ててまた触手を引っ込めた。

鎮める方法はないの……？」

苦悶しているかのようにうごめく黒い気配を見つめつつ、

そして今は、それが正しいことのように思える。なぜなら自分もそうして、踏みにじられてきたからだ。

何度生まれを呪ったことか。望んで異形に生まれてきたわけではないのに、ただそれだけを理由に忌み嫌われた。

そしてその呪いは、やがて他者に向けられた。自分に何の罪がある。なぜ自分がこんな仕打ちを受けなければならぬのか。これが世の中の理なら、そんな世界は壊れてしまえばいい！

沙夜は血の涙を流しながら、そう考えた。

——けれど。もしこの世界が壊れてしまったら。あのひとも、いなくなってしまう。

沙夜は思い出した。苦しむ自分に、血を分け与えてくれた少年を。ひとりきり涙を流す自分の頬を、優しく包んでくれた彼を。

次々思い出していく。ようやく出会えた、心分かち合える仲間。そして今も、自分を案じてくれる少女がそばに。

負の想念が、自らの内から消えていくのがわかった。

体を包んでいた触手が、戸惑ったように離れ、うごめく。

沙夜は自ら手を伸ばし、触手の一本をつかんだ。

闇にだけ目を向けないで……。きつと、逢えるよ……」

御霊が、動揺したように震える。

そのとき、沙夜は見えたような気がした。憎しみの向こうにあるものが。彼らを憎悪に縛り付けるもの。

真実をつかもうと、さらに一步踏み出した瞬間——。

闇に、堕ちた。

何も見えず、何も感じられない。ただ闇だけが周囲に広がっている。絶対的な孤独。そして、次に。

体中を引き裂かれる痛みに襲われ、沙夜は悲鳴をあげた。

「あぁ……こ……こんな……」

沙夜は御霊にシンクロしすぎていた。撃たれ、裂かれ、焼かれ、潰され、食らわれたものたちの痛みが、沙夜の精神と肉体を苛んでいく。恨みと憎しみにすべて塗りつぶされ、沙

夜自身が御霊の一部と化そうとしていた。

そのとき——。

「睨め、兄弟」

聞き覚えのある声とともに、視界が真っ白になった。

衝撃に弾き飛ばされた沙夜を、薙が支える。

沙夜が目を開けたとき、御霊の姿は消えていた。

そしてそこに立つ、ひとりの男。

将士……？」

一瞬、何が起こったのか沙夜にはわからなかった。

自分はあるの御霊に取り込まれて、彼らの叫びを聞いた。そして自らの内面とも向き合い、そして――、何かを、つかもうとした、そのとき……闇が……。

悪寒が背筋を駆け抜け、沙夜は自分を抱いて身震いした。震えながら立ち上がり、将士の前へ一歩一歩歩いていく。

助けて……くれたのね……」

「……」

そう云いながら、沙夜の表情に感謝の色はない。何か様子がおかしい、と薙は感じた。

「でも……どうして……？ どうして……殺したの……？」

「さやっち……？」

「彼らは……悲しんでいた……。ただ、それだけだったのに……」

見開かれた、焦点の合っていない瞳から、涙が流れる。

錯乱しているのか、と薙は思った。

しかし、そうではなかった。沙夜は、確かに悲しみの声を聞いたのだ。憎悪と呪詛の裏にある悲しみを。

将士は黙って沙夜の涙に濡れた瞳を見返していたが、ややあって、呟いた。

「その悲しみに溺れて、奴らの贄になればそれで満足だったのか」

「そんなこと……」

「百惚れるなよ」

将士の低い声には、怒りがあった。憤り、と云うべきだろうか。沙夜は息を呑んで将士を見上げた。

「奴らの悲しみを知ったところで、どうなるというんだ。救うことができたのか？ 何が救いだ？」

「それは……」

「あぁなっては、もはや死なせてやることしか救いはない。死ねば、憎み続けることもないんだ」

「……」

「お前は、自分の手を汚すのを恐れるだけの卑怯者だ」

吐き捨てるように云うと、将士は身を翻して歩き出した。

その前に、薙が走り出る。悔し涙を浮かべて将士を睨みつけ、平手打ちを放った。

「あんたなんかに、さやっちの何がわかるって云うのよ！」

「……」

世の中に背を向けて、自分からも逃げ出した男が……卑怯者はあるのほうでしょ!？」

「やめて、薙」

「……でも！」

「いいの。……本当のことだから」

「さやっち……」

抑揚のない声で呟く沙夜のほうを一度振り返ったあと、将士は何も云わずに歩き去った。

沙夜が、ぺたん、と座り込んだ。虚ろに開かれた瞳から、ただ静かに涙が流れ続ける。

「さやち……ち……？」

薙の呼びかけにも、沙夜は答えない。心が壊れてしまったかのようなその姿に、薙は恐怖した。

「ねえ、さやっち、どうしたの？ しっかりして」

肩をつかんで揺さぶる。沙夜はやはり薙のほうを見ようとせず、呟いた。

「将士の……云うとおりだわ……」

「何云ってるの？ あんな奴――」

「私には……何もできない……。手を汚す勇氣もない……。奇麗事を口にするだけで、現実から目をそらしていたんだわ」

「遅うよ！ さやっち、それは違う！」

「――じゃあ！」

振り向いた沙夜の表情には、狂気に近いものがあつた。絶望に震え、すがるように薙の腕をつかむ。その力に、思わず薙は眉をひそめた。

「さやっち、痛い……」

「じゃあ、何ができるって云うの？ あんなに……あんなに深い悲しみ……。癒せるなんて、思ひ上がりだった……私……」

薙の腕をつかんだ手から徐々に力が抜けていき、沙夜はその場に倒れそうになった。薙が抱きとめると、その腕の中で沙夜は泣き崩れた。

そう、闇に囚われたとき、沙夜は確かに悲しみの声を聞いた。しかしそのとき、沙夜はただ、怖かった。恐怖に震え、一瞬とはいえ心を閉ざした。

彼らと向かい合うだなんて、口清いことを云いながら。沙夜は自分自身が許せなかった。

「さやっち……」

唇をかみ締めて、薙は沙夜の体を強く抱いた。そうしないと、沙夜が壊れていきそうに思えて。

やはりダメなのだろうか。私の願いは、叶えられないのか。「しっかりしてよ、さやっち。私やパパをあんなに信じてくれたさやっちが、どうして自分をそんなに信じられないの？」けれど沙夜は、泣きじゃくりながら、子供のように首を振るばかりだ。

昨晩、母のように自分を優しく包んでくれた沙夜が、今は幼子のように震えている。そしてそれは、そこまで彼女を追い詰めることになったのは、きっと自分のせいなのだ。

薙は沙夜の髪を撫でた。この上ない優しい笑顔で。

「わかったよ、さやっち」

もう、いいよ……そう、薙が云おうとしたとき。

「おねえちゃんたち？」

子供の声。薙が振り返り、沙夜も思わず顔を上げた。

そこには、目を丸くして立つ少女がいた。十歳かそこの、

まだ童女と云っていい。黒い艶やかな髪が、愛らしかった。手には花を何本か、花束のように捧げ持っている。

「美由紀ちゃん……」

薙がその名を呼ぶ。沙夜も思い出した。あのとき、御霊から助けた少女だ。沙夜は、名前までは知らなかったが。

（みゆき……？ どこかで、聞いたような……）

「どうしたの、おねえちゃんたち？」

美由紀が、小走りに近づいてくる。薙は笑顔を作り、沙夜はうつむいて涙を隠した。

「美由紀ちゃんこそ。危ないから山に入っちゃダメって云ったでしょ？」

「うん……だけど……」

薙との約束を破ったことで、美由紀は口籠もって下を向いた。だが、座り込んだままの沙夜が気になってしょうがないらしい。

「おねえちゃん、どうしたの？ 泣いてるの？」

「……ううん」

沙夜は涙をぬぐいながら、なんとか笑顔を作ろうとしたが、なかなか成功しなかった。

薙が美由紀の肩に手を置いて、云った。

「おねえちゃんは、つらいことがあったんだ。そっとしておいてあげて」

「そう……」

我がことのように、美由紀は表情を曇らせた。そして手に持った花を、沙夜に差し出した。

「……え？」

「これ、あげる。元気出してね」

「美由紀ちゃん……」

おずおずと、沙夜は手を伸ばして花を受け取った。触れたら壊れてしまうのではないか——そう恐れて。

しかし、手の中の花は、そして手に触れた小さなぬくもりは、消えることがなかった。

「ありがとう」

沙夜は微笑む。涙は止まらなかったけれど、指先の小さなぬくもりが、心の中に小さな灯を燈した。

少女もまた笑顔を返し、——そして沙夜の背後から迫るものに気づいて、表情を凍らせた。

「さやっち！」

薙の警告が飛ぶより早く、沙夜は美由紀を抱いて跳躍していた。

さっきまで彼女らがいた場所に、黒い触手が突き刺さる。振り向いた先には、黒い闇がうごめいていた。

「そんな……？」

「さっきは、散らしたただけだったみたいね。相当しぶといわ」

滅したとばかり思っていた御霊が、再び集合して現れていた。しかも、攻撃を受けたせいか、先ほどより荒れ狂っている。もはや止める術はなかった——たったひとつの方法を除いて。

「さやっち……」

薙が、沙夜を促す。しかし沙夜は目をそらし、うつむくばかりだった。

「私は……」

「……！」

突然、薙は沙夜の胸倉をつかんだ。驚く沙夜の頬に、薙の平手が飛ぶ。

美由紀が、びくっと肩をすくませた。

「いい加減にしなさいよ！」

「……薙……」

「やるべきことって、人に教えてもらおうの？ 自分に何ができるか、確かめたくって旅に出たんでしょ？ だったら、今、

自分がやれることをやるしかないじゃない！」

薙の双眸から涙がこぼれる。頬を打たれた沙夜以上に、薙自身が痛みを感じていることが、沙夜にはわかった。

「でも……私にできることなんて……」

「戦えるわ」

「……！」

「今、戦わなければ、その子は死ぬ！ それでもいいの!？」

薙が美由紀を指差す。沙夜が振り向くと、美由紀は恐怖に茫然としていた。沙夜と目が合うと、すぐのように手を伸ばしてくる。

「おねえちゃん……」

沙夜は身をかがめ、美由紀を抱きしめた。あたたかかった。

闇の者より、人の命のほうが尊いなんて思わない。だけど、この腕の中の小さな命が、いわれのない妄執によって失われるなんて。

この子が、人として生まれた以上、人間すべてへの憎しみにさらされるのは当然なのか。——それでは、自分が受けた仕打ちと変わらないではないか。

そんなことを繰り返して、なんになるの。

腕に抱いたぬくもりに、沙夜は決意した。

「天丈夫よ……。少し、目をつぶっていてね」

安心させるために、精一杯優しい声で囁く。美由紀は頷き、素直に目を閉じた。

沙夜は立ち上がり、御霊を見据える。

瞳には変わらぬ悲しみと、強い意志が。

その姿に、決意に、薙は涙を流した。希望と、慙愧とに苛まれて。

「薙」

沙夜が右手を薙に差し出しながら、呼びかける。

「薙は強く頷いた。」

「はい」

五指を広げ、両手を顔の前で合わせる。まばゆい輝きが辺りを包み、その神気に御霊がおびえてあどろさした。

そして輝きがやんだとき、沙夜の手には黒光りする神剣・

天叢雲が握られていた。

一度はひるんだ御霊が、再び沙夜に向かって触手を伸ばす。

沙夜は涙をこぼしながら、ためらわずに剣を掲げた。

「もう……おやすみ」

一閃。神剣の軌跡はそのまま光の柱となって大地を走り、御霊を引き裂いた。

声にならない叫びが、空気を震わせる。

叢雲に断たれたものは、この世のすべての縁を失う。あらゆる呪縛も妄執も、すべて刈り取ってしまう。

それゆえ誰もが叢雲を恐れる。御霊を形成する霊たちも、おびえ、逃れようとしたが、叢雲の輝きはすべてを飲み込んでいった。

彼らの恨み、憎しみ、嘆き、悲しみが、叢雲の刀身を通じて沙夜にも伝わってくる。

けれど今度は、それに溺れはしなかった。彼らの想いをすべて受け入れ、背負うために。沙夜は叢雲を振るい続けた。

（ヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテ）

（イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ）

慟哭が沙夜の心を刺す。沙夜は歯を食いしばって、最後の一薙ぎを払った。

白光が、すべてを包んで輝く。

その輝きの中で、沙夜はすべてを悟っていた。

＊

輝きが消えたあとも、沙夜は叢雲を手にしち尽くしていた。

もはや涙はない。

いつの間にか日が落ち、星空が見えていた。沙夜はその星空を見上げて、呟いた。

「救いに……なったのかな……」

（わからない……。でも、彼らが解放されたのは、間違いない

わ）

薙の思念が答える。沙夜は力なく頷いた。

（彼らを縛り付けていたもの……それは……）

「わかってる」

気を失っている美由紀のほうに歩きながら、沙夜は呟いた。

「わかってるわ」

もう一度繰り返す。

決着は、まだついていなかった。

小屋の前に腰を下ろして、将士はずっと闇を見つめていた。その闇の向こうから現れるはずのひとを、待ち続けていた。そして、彼女は来た。くろがねの輝きを放つ刀剣を携えて。

「……」

何も云わず、将士は立ち上がった。

沙夜も沈黙したまま、将士の前に立つ。

将士は叢雲を見つめながら、口を開いた。

「斬ったのか」

「ええ」

叢雲をゆっくり持ち上げて、沙夜が答える。切っ先をまっすぐに将士に向けた。

将士は動じることなく、その剣先を見据えている。

「彼らを斬ったとき、彼らの心が流れ込んだ。そのとき、わかったの。彼らの呪詛に力を与え、御霊となさしめたのは――」

「俺の心だ」

相変わらず平静なままで、将士が告げる。

彼の見つめる剣先が、震えていた。沙夜は唇をかみ締めて、

将士の瞳を見据えている。

今度は、将士は視線をそらすことはなかった。

「どうして……？」

搾り出すような声。人を呪う妄執に憑かれているように、見えなかった。今でも信じられない。あんなに優しい仕事で、私の涙をぬぐってくれたのに。

俺にもわからない」

自嘲気味に、将士は微笑んだ。

憎むことさえ、捨てたつもりだった。けれど俺の中の闇に、人を呪う心が残っていたのかもしれない。それが、奴らに力を

与えた。――いや、俺の負の想念こそが、奴らと呼んだのかも、な」

「……」

「無意識つてのは、怖いもんだ。奴に触れるまで、俺は気づきもしなかった。あれが俺の心を映したものだなんて」

将士は軽く肩をすくめた。沙夜は答える言葉を持たない。

自分の中にも、その闇はあるはずだから。

俺を、斬りに来たんだろう？」

「……」

望むと望まざるとに関わらず、俺がいれば、また同じことを繰り返す。負の想念の根源を絶つには、俺を斬るしかない」

「……そうよ」

答えながら、叢雲を持つ沙夜の手はますます震えていた。

それしかないのか。ほんとうに、それしか。

その沙夜の様子に、将士は小さく笑った。その笑顔は、とても優しかった。

「ちよつとは腹が据わったかと思ったら、相変わらず甘ちゃんか」

眩きながら、山のほうへ向かって歩き出す。思わず身構える沙夜を振り返って、云った。

「その甘さに、甘えさせてもらおう。最後に行きたいところがあるんだ。つきあってくれ」

「……いいわ」

叢雲を持つ手を下ろして、沙夜が答えた。将士のあとにしたがって、山へ入る。

（さやっち……）

天丈夫よ」

将士は振り向くことなく、山に分け入っていく。沙夜は足を速めてそのあとを追った。

*

一歩足を踏み入れると、空気が全く違うことに気づいた。清浄、と云っていいのだろうか。自然のままの空気に満ちている。

「ここは……？」

「里」だ

やはり振り向かず、将士が答えた。足早に歩く彼を見失わないよう、沙夜は小走りにあとをついていく。

「里……。じゃあ、ここが、あなたたち一族の……」

「そういうことだ」

まつろわぬものにも、本貫地がある。帰るべき場所が。「一族」を持たない沙夜は、うらやましくもあった。

「どうして、ここで暮らさないの？」

「ここにはもはや誰もいない。ここにあるのは……過去だけだ」

過去だけを見つめて暮らすのは、耐えられなかったのか。それなら、ひとりきりあの小屋で、何を見据えてきたというのだろう。

そう考えたが、沙夜は訊くことはできなかった。

しかし、将士は、その疑問に気づいていたのかもしれない。茂みをかき分けながら、呟いた。

「ここには過去と……俺の罪が、ある」

罪……？

少し開けた場所に出た。立ち止まった将士の脇に立ち、その視線の先をたどる。

そこには塚のように土が盛られ、小さな墓標が立っていた。

将士が微笑みながら、墓標に向かって語りかける。切ないほど、優しい笑顔で。

「久しぶりだな、深雪。寂しい想いをさせてすまない」

（みゆき……？）

あの少女の名前を聞いたときと同じく、沙夜はその名に聞き覚えがあった。

将士は墓標を見つめたままで、言葉を続けた。

「もう……何年前になるかな。俺は、人に育てられたんだ。自分自身の本性にも、気づくことなく」

「……」

「だけど、あるとき、知ってしまった。俺は、違うと。そしてそのことは、最悪の形で周りににも知れた。親友だと思っていた男が、俺を指して云ったよ、『化け物』って」

沙夜は目を閉じて、胸の痛みを耐えた。

自分の身の上を、聞かされているようだった。

「それだけじゃない。奴らは……深雪を俺から奪った……永遠に……」

唇をかみ締め、将士は胸の奥からこみ上げる想いに耐えた。

今でも忘れない。忘れることなどできない。将士を守ろうと、彼女が銃弾に身をさらしたその瞬間を。真っ白な雪が、赤く染まって……。

「人を呪いたい……！ 憎しみに身を任せて、奴らをすべて引き裂いてやりたい！ だけど……だけど……俺を愛してくれたひととまた、人間なんだ。俺のために命を投げ捨て、俺の腕の中で、ただ『愛してる』と囁いて逝ったあいつも……！」

ひざまずき、将士は大地に拳を打ちつけた。感情の高ぶりに呼応するかのように、木々がざわめいた。

森が、山が、――「里」が、悲しんでいる。沙夜はそう思った。

「何を呪えばいい……何を憎めばいい……！ 深雪を撃った奴か？ 俺を裏切った男か？ そいつらを殺せば、俺は満たされるのか。そんなはずない！ そんなはず……」

肩が震える。想いの激しさが、将士から言葉を失わせた。沙夜もまた何を云うこともできず、彼の背中を見つめるだけだった。

やがて、将士は立ち上がり、沙夜のほうに振り返った。

深い悲しみを宿した瞳。そのまま自分を映したように。

『だから俺は……悲しみの中へ逃げ込んだ……。人との関わりを断ち、深雪の墓守として、生涯を終えようと思ったんだ。ひとりであれば、誰も憎まずにすむ……。そう、思った……。けど……。』

そこで将士は、自嘲気味に微笑んだ。

その笑みから、思わず沙夜は目をそらしてしまった。やめて。そんな風に笑わないで。

俺は、自分の中の闇から目をそらしてただけだった……。叢雲の云うとおりだよ。卑怯者は、俺のほうだ」

将士……」

『以前は毎日ここへ来ていたのに、最近は、なぜか足が向かなかった。それはきっと、奴が出た頃と符合している。俺の中の負の心が、ここから自分を遠ざけていたんだろう』

もう一度墓標に向き直り、将士はその前にひざまずいた。その前では、いつも別人のように優しげな表情になった。

『そのせいで、ずいぶん寂しい想いをさせた。許してくれ、深雪』

将士……！」

こらえきれず、沙夜は涙をこぼした。

沙夜は思い出していた。

そう、あのとき。将士に助けられたとき。ただひたすら、その名を呼ぶ声が聞こえた。二度と手に入らないものを呼ぶ声。

(そう……だったの……)

あのとき聞いたのは、将士の嘆きだったのだ。押し殺した悲しみが、嘆きが、負の想念を呼んだ。

それを、誰が責められるだろう。

そして、将士の本当の痛みもまた、沙夜は理解した。

将士は、誰を憎めばいい、と云った。けれど本当は、信じたかと思っただけ傷つき、血を流しても、自分を愛してくれたひとたちを信じたい。信じていたい。それなの

に。

最愛のひとつと同時に、信ずべきものも見失ってしまった。想いだけでは、信じる心を支えられない。

だから、将士は沙夜に訊いたのだ。なぜ、と。

『お前が悲しむことはない』

気がつく、と、将士の手が沙夜の頬に触れていた。初めて逢ったときと同じように、優しく涙をぬぐってくれる。

俺の弱さが招いたことだ」

還う……。違うわ……。そんな……。』

優しく微笑むと、将士は深雪に最後の別れを告げようとした。

そのとき、初めて気づいた。その花に。

墓標に、花が供えられている。まだ新しいその花は、ここ数日のうちに捧げられたものだった。

誰も来るはずのないこの場所に、なぜ？

将士は震える手でその花を取り、茫然と見つめた。

(さやっち、誰か来るよ)

雉の呼びかけに、はっと沙夜が振り返る。確かに茂みをかき分ける音がある。

ふたりが見つめる前に姿を現したのは、小さな黒髪の女の子だった。

美由紀ちゃん……！」

あ、おねえちゃん」

沙夜に花をくれた少女が、あのときと同じように、目を丸くして立っていた。やはりあのときと同じように、手に花を持っている。

『みゆ……。き……。？』

その名に驚いて、将士が美由紀の顔をまじまじと見つめる。美由紀は不思議そうにその目を見返した。

『美由紀ちゃん、どうしてここへ？ もうこんなに暗いのに……お家へ帰りなさいって云ったでしょ？』

腰をかがめ、美由紀と視線の位置を合わせて、沙夜が少し

きつい口調で云う。先生に戻ってる、とこんなときだが難は考えた。

『ごめんなさい……。でも、今日はまだ、お花をあげてなかったから』

そう云うと、美由紀は墓標の前に歩みより、手に持った花をそっと置いた。祈るように、その場でしばし目を閉じる。

沙夜は将士と一瞬目を見交わし、美由紀のそばに腰を下ろした。

美由紀ちゃんが、お花をあげていたの？ 毎日？

「うん」

「ここへは……どうして？」

「道に迷って……」

その答えに、沙夜は将士を見上げた。黙って将士が頷く。本来、一族の者しか入れない『里』に、ふとした弾みで人が迷い込んでしまうことはある。そのまま帰れなくなつて、神隠しと云われたりするのだ。だが、同じ場所に自由に出入りできるのは、稀有な例といえた。

「そっか……。初めて会ったときも、ここへ来ようとしていたのね？」

こつくりと美由紀が頷く。あんな山奥にどうしてこんな小さな子がひとりでいたのか不思議だったのだが、そういう目的があったのだ。

けれど、どうして美由紀はそうまでしてここに通うのだろうか？

「あんな怖い目にも遭ったのに……どうして？」

沙夜の問いかけに、美由紀は首をかしげた。意味がよくわからなかったようだ。沙夜は質問の形を変えた。

「どうして、ここにお花をあげようって思ったの？」

美由紀は、目をぱちぱちとしばいた。沙夜の顔を見、そしてその後ろの将士の顔を見上げる。そうして、にっこりと微笑んだ。

「だって、とっても大切にされてる場所だって、わかったから」

沙夜も将士も、言葉を失った。

たったそれだけの理由で。誰かが大切にしていた場所。そのことを悼んで、少女は毎日花を捧げた。森の闇におびえながら、決して近くない距離を毎日駆けて。

将士が膝をつき、美由紀を抱きしめた。美由紀は一瞬驚いて目を見張ったが、嫌がりはしなかった。

将士の全身が震える。美由紀は小さな手で、そっと将士の頭を撫でた。

「おにちゃん、泣いてるの？」

「……」

将士は答えられない。ただ涙が、止まらなかった。

「元氣出してね。おにちゃんにも、お花あげるから」

将士の髪を撫でながら、美由紀が優しく囁く。その姿に、もうひとりの少女の姿が重なって見えたように、沙夜には思えた。

将士はただ涙を流し続けた。

彼が信じようとしたものが、確かにそこに、あった。

「じゃあ、行くね」

「ああ」

短く答えたあと、将士は、照れくさそうに付け加えた。

「……気をつけてな」

「ありがと」

朝の光を受けて、まぶしい笑顔で、沙夜が答える。薙は無理に無然とした表情を作って横を向いたが、どうしても笑みがこぼれてしまう。

そんな薙に向けて、将士も笑顔を見せた。

「また同じことを繰り返しそうになったら、遠慮せず斬りに来い」

「どーぜんよ」

薙は背を向けたままで答えた。沙夜は小さく微笑んで、肩をすくめた。

「そんなことしたら、美由紀ちゃんが黙ってないでしょ。すっかり懐かれちゃって」

三人が、河原のほうに目を転じる。そこでは水遊びに興じる美由紀がいた。

しばらくその姿を見つめたあと、沙夜が呟いた。

「もう、大丈夫よね」

「ああ……」

答えながらも、しかし、将士はやや表情を暗くする。すべての不安をぬぐい去れるわけではない。

「美由紀も……いつまでもあのままではいられない。いつか、俺に恐怖する日が、来るかもしれない」

将士……」

思いがけない言葉に、沙夜は将士を見上げた。その視線に對し、将士は陰のない笑顔を向けた。

「それでも俺は、彼女に救われたことを忘れない。だから、信

じていられるさ」

「……うん」

沙夜は頷いた。

それは一種の諦めだと、人は云うかもしれない。いつか失う日のことを思うのは、本当に信じているとは云えないのではないかと。

けれど、と沙夜は思う。人は変わる。想いも……うつろう。それでも決して傷つかない、失うことのない何かを見つけたなら、それだけを信じて生きていける。自分にとってのあのひとのように。そう、生きていける……。

美由紀が、三人に気づいて駆け寄ってきた。気配を察したのか、瞳に涙を浮かべている。

「おねえちゃんたち、行っちゃうの？」

沙夜は腰をかがめて、微笑んだ。

「また、逢えるよ」

「ほんと？」

「うん。……ね」

将士を見上げて、沙夜は云った。美由紀も不安げに将士を見上げる。

将士は美由紀の頭に手を乗せ、笑顔で頷いた。

「逢えるさ」

美由紀の笑顔が、ぱっと輝く。何よりの餞だと、沙夜は思った。

＊

「ばいばーい」

いつまでも手を振っている美由紀に振り向いて、薙が何度目の声を張り上げる。沙夜も大きく手を振った。

互いの姿が見えなくなるまで、そんなことが繰り返された。

「さて……と。次はどこへ行こっか」

「そうねえ……」

今度はあったかいところがいいなあ」

「……ほんつとお気楽極楽なんだから」

苦笑しながら、沙夜は薙の横顔を見た。

将士は警告した。叢雲に気を許すな、と。

しかし、頬を打たれたときの薙の言葉と、その涙。そこには、真実があった。

だから、信じられる。信じていける。

「……なに？ 人の顔、じろじろ見て」

「うん、なんでも」

「あんまり美人だから見とれちゃった？」

「はいはい。じゃあ一仕事終わったってことで、ぱーっといきましようか！」

「さんせい。今日は乗りがいいね、さやっち」

薙に気合入れてもらったからね」

自分の頬を軽く叩きながら、沙夜が云う。薙は、う、と言葉を詰まらせた。

「……根に持ってる？」

「全然。でも、痛かったなあ」

「……基本的に暗いんだから……」

「なんか云った？」

「なーんにも。さ、行こ行こ。早くしないと日が暮れちゃうよ」

「まだ午前中よ」

細かいことは気にしないの。出発しんこー」

沙夜の肩に腕を回して、薙は歩き出した。

その無邪気な笑顔につられて、つい沙夜も笑ってしまう。そしてそれはきつと、幸せなことなのだ。

いつか失う日が来るのだとしても。今のふたりの絆は、真実だから。

「……どしたの、さやっち」

薙が怪訝そうに云う。

「え？」

気がつくのと、沙夜は涙を流していた。

「やだ。笑いすぎ」

微笑んで、涙をぬぐう。けれど、涙はなかなか止まらなかった。

陽光を受けて、朝露のように、涙が輝いた。

The RING of BLOOD
2nd Episode
"Nothing Hurt"
END

あとがき

ちよっと『トライガン』入ってるかもー、と、自分でも思いました(笑)。さしずめ難はウルフウッドですね。

伊達将士は、私が一二年ぐらい前に書いたオリジナル小説『孤狼伝』の主人公です。某新人賞に応募して、二次選考ぐらいまでいきました。

そこで自分が世の中に認められないのに絶望して筆を折った……わけじゃないんですけど(笑)、それを最後に創作活動は一切していませんでした。去年、久遠に会うまでは。

自分的には結構気に入っていた話だったので、こういう形ででももう一度引っ張り出せたのは嬉しく思っています。自己満足ですね、すみません。

結局、将士の正体はなんだったのー？というのは、『孤狼伝』というタイトルから察してください。私の原点は平井和正のウルフガイシリーズなんです(笑)。感想などいただければ幸いです。

二〇〇一・三・七
八神大輔